BEACON 2015　吉岡　洋

BEACON 2015 は、「空を見上げる」という行為に注目する。「見上げる」という行為を通して、互いに隔てられた場所や人々を結びつけることを、試みたい。

人はそもそも、どんなときに空を見上げるのだろうか？

それはたとえば、この世の煩いから離れたいときであり、遠い存在に思いを馳せるときかもしれない。

またそれは、希望を持とうとするとき、あるいは反対に、絶望したときであるかもしれない（見上げるという行為において、希望と絶望とはつながっている）。

さらには乗り越えがたい障壁によって、突然行く手を阻まれたとき。それはつまり、自分は今まで閉じ込められていたのだと、知ったときだ。

空を見上げる。空には境界がない。

空においては、生と死すら隔てられていないかのように感じられる。この〈境界の無さ〉によって、空は私たちをやさしく抱きとめてくれる——そんな気がする瞬間もたしかにある。

けれどまた人は、空から迫りくる脅威に気づいて、思わず空を見上げる、といったこともあるのだ。

飛行体の黒い不穏な影。ジェットやプロペラの音。

空。頭上に広がるこの圧倒的な空虚は、「安全」という幻想を打ち砕き、私たちが実はまったく護られてなどいないこと、原理的に無防備な存在であることを、告知するものだ。

空を見上げることは恐ろしい。それでも、空を見上げることは大切であると思う。私たちは、見上げる存在であり続けたい。本当に恐ろしいのは、人々がもはや空を見上げなくなるときではないだろうか。

＊　＊　＊　＊

沖縄に撮影に来たと言ったら「〈基地〉を撮りに来たんですか？」と尋ねられた。

僕たちは基地を撮りに来たのではない。**BEACON** がこれまで映し出してきたのは、いつも名もない日常の風景であったし、そのことは今回でもまったく変わりはない。けれど沖縄で撮影すれば、〈基地〉（あるいは〈基地〉的なもの）は自然に写り込んでしまう。それを意図的に避けないかぎりは。

美術が社会問題に言及するとき、美術は社会問題を自分のために「利用」しているのではないか？という疑いが、いつも起こる。この疑いを晴らすために、美術は社会問題にけっして言及しないという立場もあるし、逆に美術なんかどうでもよくなって、社会運動と一体化してしまうという立場もある。ぼくはどちらにも進めなかったので、この疑いの居心地の悪さをむしろ受けいれ、維持したいと思った。

主題化したいのは、意図的に造られながら自然なものとして提示されてきた現実、分断された日常的現実の様相である。一方には終わらない戦争と〈基地〉の沖縄があり、もう一方にはエキゾチックに観光化された沖縄がある。前者についてはシリアスな顔で議論すべきで、後者は無邪気に楽しめばよいとされている——けれどこんな分断は作為的だ！ 要するにどちらも、その場所は「日本でありながら日本でない」と言っているだけなのだから。

BEACON 2015 によって提示したいのは、沖縄特有の問題とか魅力ではなくて、沖縄という場所は今私たちがいるこの場所（岐阜、京都、etc.）と連続しているという、ごく当たり前の事実である。空を見上げれば、その連続は実感できる。見上げることは、世間から自分を切り離す行為でもあるのだが、そのことによって同時に、新しい連帯を求めること、改めて手をつなぎ合う行為でもあるのだ。